

て見よ。さて汝等が財寶を、彼等にも施し與へて、天道の正しさを世に  
示せ。

エツア(家の中)一尋半ぢや、一尋半ぢや。さても哀れの狂人。

と道化小舎の中より走り出づる

道 我君々々、此家へ御入り御無用。怪物が居ります。お助け。

ケン サ、御手を取りませう。コレ誰ぢや。

道 怪物々々、自分から狂人ぢやと云うて居る。

ケン (小舎の中)ヤア其處に唸つて居るは何者ぢや。出てうせう。

とエツアヤ、狂人の糞し姿にて出来る

エツ 往ね、悪魔が己を尾け廻すわ——棘の原を風が吹く。フ、ム冷  
たい寝所で暖まれ。

リッ ヤア其方も二人の女に、家藏を譲つて了つて、それで其様になりや  
つたか。

エツ 狂人に何ぞ物を下されい。悪魔に引かれて火の中、焔の中、淺瀬渦卷  
沼越え澤越え苦勞する。枕の下には劍を置き、梁には縊繩を懸け、枕の  
中へは毒を入れ、暴馬を乗り廻して、丸木橋を渡らせ、自分の影見て  
狼藉者と追懸ける。是もみんな悪魔の業。いや方々は正氣でも芽出度  
う。已や寒い、お、寒、お、寒、お、寒、ぶる。星の祟り旋風、悪い毒氣に觸  
れぬやうに祈ります。申し悪魔に憑かれる物狂に、何なりと御報謝御  
報謝。ヤア此處へ來た、捕へて遣れ。(悪魔が彼の目に)ヤア其處だ、又此處  
へ來た、それ其處だ。

暴風雨未だ止まざる跡

リア さて、此奴も女故にかうなつたか、コレ其方は何ぞ残して置いたか。悉皆遣はして了つたか。

道 ハテ毛布一枚が残してあるではムリませぬか。あれが無かつたら、ほゝ丸出し(毛布一枚を腰の周圍に纏て居る故なり)。

リア え、大千世界のあらゆる神罰を、悉皆此奴が女に降して遣りたい。此奴に女はムリませぬ。

リア ヤイ、不孝娘を有つた因果故でなうて、何で此様な風躰にならうぞい。さて、子に棄てられた父と申すは、みんな斯様に我が肉躰を原野に曝して厭はぬものか。おゝ此肉躰こそ不孝娘の親なるに、え、天罰を降して呉れたい。

道 今夜の此寒さては、誰も恐人か狂人にならずには居られませぬ。

エツ 悪魔を御用心々々。親には従へ、約束は違ふな。誓言は禁物。他人の女房にや手を出すな。華美な衣裳に眼を奪はれな、己れや寒い。

リア 其方は何者の成れの果ぢや。

エツ 元と拙者は侍士で威張つたもの。毛を縮らして、帽子に女の手袋を挿み(女の手袋は女より愛情の紀念として送るもの)。萬事女の氣に入るやうにと氣を揉んで、随分面白あかしい遊びもし。神様を遠慮もなう引出しての誓詞呼はり。寝る時は道樂の工夫、起ればそれを試してみる。酒好き、骰子好き、女好きでは土耳其の王様も其方退け。性悪、移り氣、薄情で、豚のやうに怠け、狐のやうに狡猾く、狼のやうに貪慾で、猛々しさは犬の様。酷たらしさは獅子のやう。ハテ優しい靴のさしむ音、裳の絹のさやぐ音で、女に心を銷かされぬ用心召され。茶屋小屋へは足を入れぬ事。女の袂へは

手を入れぬがよし。質屋の帳面へは筆をつけぬやう。そして悪魔には  
憑かれぬ算段。棘の原にはまだ風が吹く。ひゆう〜と鳴るわ響くわ。  
へい、ノンニ。コレ〜。悴逃がして遣はせ。

暴風雨尙ほ止まざる体

リア さて〜其方は、其裸體を此吹降に曝して難澁せうより、早う墓の  
中へ逃げ込んだが幸福であらうに。あゝ人間とはかやうなものか。よ  
く〜想ひ廻らすに、其方は蚕の虫の世話にもならず、獸に皮、羊に毛  
猫(麝香猫)に麝香の恩恵も受けぬ。然るに我等三人は、かやうな物を  
纏ひ居るは、是ぞ皆な虚偽。其方こそ露飾り氣なき人間の正體げに生  
れながらの人間は、其方同様、身に一糸をも纏はず、二本の脚で歩む。哀  
れげの動物であらう。え、此様な借物(己が衣服)棄てた〜。コレ此紐

を解いて呉りやれ。

とリア 己が衣裳を引裂くこなし

道 何卒我君暫く〜。水練には不向な今夜でムります。ハテ野中の燈  
火は浮氣な老人の胸の中といふもので、身體中は冷めたいに、たつた  
一つほてる點があるやうなものでムります。御覽あれ。それ其處へ  
火影が步つて参りました。

とクロスター 松明を持ち登場

エツ ヤア〜此奴が悪魔ぢや。暮合から一番雞の鳴くまで彷徨いて、人  
の眼を内障眼にしたり、偏視にしたり、鬼缺の唇を拵へたり、麥の穂を  
枯したり、其外地上の虫に傷害を與ける。

魔王が三度野を過ぎて夢を襲へば

ふと聞く鬼女が、九人の子を引  
き行く所を、ヤレコレ待てと呼  
留めて、以後悪戯ならぬぞよ、ま  
かと聞いたか失せよ。

ケン 如何なされました我君、

リア 今参つたは何者ぢや。

ケン 誰ぢや、何用あつて其方は、

クロ イヤ其處に居らるゝは何人ぢや、名乗りめされ。

エン 名は物狂、蛙や蟾蜍、蜘蛛や守宮、蝶、蠅を取つて食ひ、悪魔が暴れて心  
の狂ふ時は、牛の糞を糞物にし、古鼠や犬の屍骸も好下物、行潦に生え  
た青苔を飲みもする。里から里へとたゞさ拂はれ、械にも懸けられ、牽

の中へも押籠められ、身を掩ふ衣服はたつた三枚、肌に着る纏袴が六  
枚。

唄、お馬でしやんく、太刀劍

それで御扶持に鼠、小鼠、小獸

七年命をつうないだ。

憑物御用心、えゝ悪魔め静かにしやれ。

クロ 何とこれは殿下、然るべき御従者も召させられず。

エン いやさ悪魔は闇の王でお人柄、そして色々の御名がある。

クロ 血肉を分けた我が子さへ、親をないがしろに致す、儼季の世の中て  
ムりまする。

エン ちゝ寒、己や寒。

ケロ 先づ／＼某と共に御出てなされ。姫君方の酷い仰に、従つてばかりは居られぬ某。殿下に向つて門を閉ぢ奉り、此物凄しい闇の中へ、御放し申せとの命（命でムれど、密かに御行先を尋ねまゐらせ、火の氣もあり、進らする物もある處へ、御案内申上げう爲め、わざ／＼かく罷出ましてムりまする。）

リア いや先づ、此悟道徹底の非人奴（非人奴と、一問答致してからの事と致さう。さて天雷響を下す其理由は、）

ケン 殿下、何卒グロスター殿の御詞に従ひ、御出なされるが宜しうムりまする。

リア いや／＼予は此大學者と少々問答が致したい。コレ其方が心に懸くる學問は何ぢや。

エツ 悪魔を拂ひ悪虫を除く學問ぢや。

リア ホ、予は内密にて、一言其方に承りたい事がある。

ケン モシ其許様（指す）には最一度御勸め申して下され。どうやら御逆上の氣味でムりまする。

グロ それに少しも御無理があらうか。姫君達は殿下を亡き者にせうとの御目算（暴風雨尙ほ吹き荒る、林）あゝ夫に就けても、あのケントは、かういふ事になるであらうと云はれたが、今は追放の身の上、不憫な事ぢや。ハテ其方は殿下御逆上の氣味と云やるが、コレ聞け、逆上は殿下ばかりか、此身も同様ぢや、と申すは拙者の悴、今は勘當致したが、遂此程、此父の命を狙ひ居つた。それも又と世に例がない程愛した悴、眞實（眞實）を申せば、拙者も其の悲嘆で、逆上致して居る。あゝ今夜は何たる夜ぢや。申し殿下、何

卒――

リア あゝ慈悲ぢや程にコレ大學者談話（はなし）が聞きたい。  
エツ あゝ寒、己や寒い。

クロ ヤイ汝（おれ）は此小舎の中へ入（はい）つて勝手に暖（ぬか）もれヤイ。  
リア いざ、然らば一同入（はい）ると致さう。

ケン から御出なされませい。

リア いや、予は彼の大學者と一緒に行く。

ケン 其許様より御なだめ申して、そして其奴（やつ）をも、お連れ遊ばすやうに  
申上げて下さりませ。

クロ 然らば其方は、其者を連れて先へ參れ。

ケン サア來い、汝（おれ）も一緒に連れて行かう（とエツがヤイ）。

リア コレ大學者。

クロ 申し御静かに、しいッ。

エツ 呎、武者修業者が來て見れば

小暗き塔の中よりぞ、ハテ

けしからぬ英吉利の、人の

血の香がきこゆるは

と一退場

第五場 グロスタ―居城内の一室

コロンサール及エドモンド登場

コ― いや此家を立ち退かぬ中、屹度復讐は致して呉れる。

エド 君への忠義故に、父への孝道を欠く某が舉動を、定めて世間は、彼是申すてムらうと思ひますれば、何か心懸りてムります。

コ一 今こそ知る其方の兄者が、父の命を狙ひしも、全く兄者が悪いばかりでもなさうな。畢竟父にも悪しき點のあればこそ、左様な親不孝も致すのぢや。

エド 正道を行ひながら、かやうな悲しい思ひを致すとは、何たる不運の此某。此が即ち父の申した密書でムります。取りも直さず佛蘭の犬なる證據。此様な叛逆三昧企むて呉れなんだら——せめて此某が訴人の役を勤めなんだらと、口惜しうムります。

コ一 一緒に参れ、夫人に此事を話して参る。

エド イヤ此密書の赴が事實なら、少しも猶豫はならぬ一大事でムリま

する。

コ一 事實であらうとわからうと、今よりグロスター伯爵の位は其方に遺す。此上は父の在所を尋ね出して申出でよ、此方より召捕らうぞ。

エド (白) うまい。國王殿下の御側に侍つて居る所を見つげ出して報知せれば、公爵の嫌疑は深まるばかり。父子の情合、少々心苦しうないでもないが、こゝは一つ何處迄も、公への忠勤を勵むと致さう。

コ一 返すくも其方は、予が重く用ひて遺すぞ。及ばずながら此上は、予を父と思つて呉りやれ。

と二人退場

第六場 グロスター居城附近の農家に

於ける一室

グロスター、リア、ケント、道化及ニッゲヤ一登場

グロ これでも野天には優てムりませう。何卒力めて御寛ろぎ遊ばしませ。某はこれより参つて御待遇の品物を何くれと精々求めて参ります。乍去間もなく戻つて参ります。

ケン 御憤激の餘り、何うやら御心も亂れた御様子。いや其許様の御親切、嬉しい事でムります。

とグロス退場

エン 夜叉が己を呼んで話すには、羅馬のネロ皇帝は、地獄の池の釣師ぢやげな。コレ道化殿、悪魔を御用心。

道 申し我君、狂人と申すは、公卿か武士か、御存じてムりませうな。

リア いや狂人は帝王ぢや。

道 いや公卿を子に有つ武士でムります。ハテ我子を公卿と見る狂人、武士と申す諺があるではムりませぬか。

リア え、千人の鬼共に、眞赤に焼けた金串を持つて、彼女奴等をさいなませて呉れたいわい。

エン 悪魔が己の背を噛むわ。

道 狼の口と馬の蹄子息の孝行と傾城の誓文を、安心と思ふ者は即ち狂人。

リア いや致して見やう。早速彼等を召喚せ。(エンに)コレ其方は此處へ坐つて、判官を務めて呉りやれ。(道に)又其方は此處へ坐つて相談役。さて此上は雌狐奴等罷出ろ。



エツ 彼を見や、悪魔が眼を光らせて立つて居る。コレ夫人達御吟味を見て貰いたいか。

唄 來やれ 情人川越えて來やれ――

道 唄舟が漏るので行きたいけれど

行くにや行かれず、いふにやい

はれぬ身の難儀。

エツ 悪魔が鶯の聲をして、此己に憑き纏ふわ、生鮎を二匹呉れいと腹の中で鳴いて居る。コレく悪魔殿、鳴くなく、汝に遣る食物は一つもなし。

ケン 殿下如何なされました、其様に呆れて御立ちなさらずとも、御腰を下して、此布團に御休みなされませ。

リア 先づ吟味を見てからの事ぢや、さゝ證人を召喚せ(エツ)御吟味役には先づ御席に着かせられい(道化)相談役の其方も其御側へ(ケン)其方も役人の數には漏れぬ、其處へ坐れ。

エツ 間違いのない處分を致さう。

唄 麥畑の中に羊は遊ぶぞや、

寝てか覺めてか羊飼、

小さい口で笛吹いたとて、

羊に障害もあるまいが、

にやんく、猫は灰毛ぢや、

リア 先づゴテリルを吟味致さう。誓言を以て申し上げます。それなる婦人は、頼み少ない父王を、足蹴に致した不届者でムります。

道 進みめされい、婦人其方が名はゴチリルと申すか。

リア 夫に相違のあらうや。

リア さて次に後一人、あの意地悪さうな顔を見ても、心の程が察せらる

しや、逃げるか、彼女を停めい、それ武器はないか、それ劍、それ鐵砲、ヤア  
しなしたり、此裁判もこれまで、心の腐つた吟味役、何故彼女を取逃が  
した。

エツ いや御心を確かに。

ケン あゝこれは何たる事、度々御自慢なされました、御堪忍は何處へ御  
忘れなされました。

エツ (旁) 御痛はしさに涙が零れて、何うやら化の皮も露れさうな、  
リア 大きい小さい犬共が、アレ見や白、黒赤、斑吠を懸ける。

エツ そんなら己が此頭を、犬共に投げつけて呉れう、ヤイ犬共失せろ。

口は白うても黒うても、噛む齒には毒がある。大犬小犬、赤斑白  
斑、矮狗、尨狗、伺犬、野良犬、唐犬、病犬、何奴も此奴もぎうといふ目  
に遭はせて呉れる。コレ此頭をかう投げつければ、三尺四尺跳  
上り、犬共悉皆逃げ失せた。

あゝ寒小寒ぶるくく。申し、さア参りませう、お祭禮へ参りませう、  
市神へ参りませう。ヤ、水筒の水がなくなつた、誰ぞ飲料を下されい。  
リア 此上はレガンの胸を割いて見て、心臓の状態を調べやう、彼の様な  
硬い冷たい心臓の出来るは、何ぞ理由がなうてはならぬ(エツ) あゝ其  
方は予が百人の侍従の中に加へて遣す、乍去其服装では困却致す。ハ  
テ其方は波斯風の美服にも、劣らぬと申すであらうが、ともかくも着

換へて呉りやれ。

ケン ハテ、殿下、何卒此床へお臥せりなされて、暫く御休息なされませ。

リア コレ黙つてく。そして帷帳を引いて呉りやれ、左様ぢやく、何れ晚餐は明朝の事ぢや、左様ぢやく、

道 そして僕は、明日日中に寝むと致しませう。

グロスター再登場

グロ コレく、國王殿下は何處に在すぞ。

ケン 此處にく、去りながらお起し申さぬやう、御亂心の體でムりまする。

グリ アイヤ、其方は殿下を御抱き申して呉りやれ。コレ、身共はな、殿下を亡き者にせうとの陰謀を立聞致して参つた、彼處に輿がある、彼輿へ

御移し申して、ドーバーの港迄御供致せ、然らば彼處には、屹度殿下を御迎へ申して御庇ひ申す者があらう。さゝ少しも早う、半時なりとも猶豫したら、殿下の御生命は申す迄もない、其方共や吾々一同、御供の者の生命は、風前の燈ぢや。さゝ早う御昇ぎ申して、身共に従いて参るがよい。旅の準備を致して進ぜる。

ケン 疲れ果て、折角御眠みなされた處、十分に御眠みなされたなら、御癒りなさらうも知れぬけれど、差迫る御難儀に、それさへ叶はぬとあつては、御快氣の程も覺束ない。(道化に)コレ、汝も手傳つて、殿下を御連れ申して呉りやれ、汝も後へは置いて行かれぬ。

グロ サアく、此方へく。

とケン、グリ及び道、王を昇きて退場

エツ 一段身分の高い者が同じ悲みに沈むを見れば、我が身の嘆は物の  
數とも思はれず、己れ一人の憂目と思へば、此世の樂みも消え失せて、  
味氣なくのみ思はるれど、我に等しき悲みの友、嘆きの同伴者ある時  
は、さばかりの身の難儀も、心はさ程に思はぬもの、彼程に國王殿下、御  
くつをれの體を見れば、何うやら忍び易くもなる我が身の上。此身は  
父故殿下は子故の同じ苦難。此上は是非もなし、世の成行に心を留め、  
此身を苦しむるあらぬ汚名の、自つと洗はれ去んぬるを俟ち、其時今  
日の假面をかなぐり棄て、我と名乗出ると致さう、イヤ此上何事のあ  
らうとも、何卒國王殿下をば、御無事に御落し申したい、先づく此身  
は潜み居らむ。

と退場

### 第七場 グロスタール居城内の一室

コーンゲール、レカン、ゴテリル、エドマンド及侍僕等登場

コー (ゴテリル) 縁姉君には、御良人ブルガンデイ公の御許へ、早馬を御立てな  
されて、此書面を御届け下されい。佛蘭西の軍勢は、既に上陸致せしと  
の事で、ムる——誰かある叛逆人のグロスタールを尋ね出せ。

と従僕の中二三退場

レカ そして縊殺して仕舞やい喃。

ゴテ 眼を扶つて棄てたがよい。

コー イヤそれは、某が料簡にお任せ下され、エドマンド、其方は縁姉君の  
御供を致して參れ、其方が父の處分は、其方に見せたりない。さて公爵

に拜謁の上は、急ぎ戦争の準備を致さるゝやう申上げい。予も同様の準備を致すであらう。此後とても早馬を以て、迅速に相互の消息を通じたい願ひ。おさらばでムる縁姉君。さらばぞグロスター伯(エドを指す)

オスソルド登場

どうぢや、國王の在家は、

オス　グロスターの伯爵が、お逃がし申しましてムります。凡そ三十五六人の武官共、御行術を尋ね罷り在りしが、御門の邊りて邂逅ひ、それに伯爵の御家來も加はり、一同殿下の御供を致し、ドーバーの港を指して、急ぎましてムります。彼處には頼もしき味方もあるとか、廣言を吐き居りましてムります。

コ　然らば其方は、夫人の御馬を用意致せ。

ゴ子　さらばこれにて公爵殿妹、

コ　エドマンド、さらば

とゴ子、エド、及オス退場

其方共も謀叛人のグロスターを尋ねて参れ。盜賊同様本繩を打ち、手が面前へ引いて参れ。

と他の従僕等退場

一應吟味の上ならでは、一命は取られぬ掟ながら、悪しと知りつゝ、抑へ難なき憤怒の情には、暴力をも用ふる習ひ。それへ参つたは誰ぢや、ヤア叛逆人を連れて参つたか。

従僕等グロスターを擔にして登場

レカ　恩知らずの狸爺。

コ 其姿を引縛れ。

グ 何を仰せられます。よう御思案なされませ。方々には此某が館の賓客。滅多な事を遊ばしますな。

コ ヤイ縛れと申すに。

と従僕グロを縛る

レガ 手硬く、お、汚はしい謀叛人。

グ 無慈悲の夫人、某は左様な者ではムりませぬ。

コ 其椅子へ引縛れ、逆賊奴目に物見せて――

とレガン、グロの下髪を引むしる

グ 髻を引きむしるとは、御卑怯ななされ方。

レガ 此様な白髪をかづいて、叛逆人とは大それた。

グ 酷たらしい夫人。今此願から御引むしりなされた、其鬚の一本毎に、魂が這入つて夫人をお恨み申しませう。某は夫人を御宿め申した宿主で、ムりまするに、其宿主の顔面に、簡様な辱めを加へるとは、盜賊同然の成され方。申し何をなされます。

コ コリヤ、其方は先刻佛蘭西より、如何なる密書を手に入れた。

レガ 明白に返答しや、様子は残らず知れてあるぞい。

コ して又、此度上陸致した逆賊奴等と、如何なる陰謀を交せしぞ。

レガ 狂亂の國王殿下は、何者の手に送り届けた、真直に白状しや。

グ 如何にも、推量半分の書面をば、落手致してムりまするが、發送人と申すは、敵でもない味方でもない。何方に何の關係もない者でムりまする。

コ 一 え、口賢くちかしこ。

レガ 不忠者。

コ 一 して何處へ國王は送り届けた、

ク ロ 即ちドーバーの港へ。

レガ 何故ドーバーへは送り届けた。あれほど堅い豫ての申付けを忘れたか。

コ 一 何故ドーバーへ送り届けた。其返答を致せ。

ク ロ 柱に繋がれた熊同然、入替り立替り犬を嗥わしかけられ、嘸なさいなまゝるゝ事てムらう。

レガ コレ、何故にドーバーへ、

ク ロ 其故と申すはな、夫人の恐ろしい爪故に、父王殿下の御眼をば、抉あり

取らせまいの意故、又は御妹君の猪しの様な牙は先に、十善の玉躰を懸けさせたらうもムらぬ故てムります。冠り物も召させられず、玉躰を御囓かしなされた冥府よみにも紛まぶ彼の闇夜の暴風雨あらしには、跳り狂ふ潮の波に、天上の星の火さへ消え失すべきを、御父王の御胸の火は、却つて空そらに一層の雨風を添へられました。彼の様な物凄ものぢい夜に、門に來つて哀を乞ふ者は、縦令た狂なりとも、今夜ばかりは日頃の害毒を大目に見て、一夜の宿を貸して遣せと仰せられても然るべきを、いや某は斯様な不孝者に、やがて天爵てんきやくの來るをば、此目で見たらムります。

コ 一 其願ねがひは叶はぬ。それ物共其倚子よこを抑へて居よ、其眼を此足で踏んで呉れう。

ク ロ コレ老人おきなを、何時かは我が身の上と思ふ者は、早う來て助けて呉り

やれ、あゝ、殘忍無慈悲、あゝ、神々。

レガ 後に「眼殘して置くも可笑からう。其方の眼も潰して丁へ。」

コ一 これて天爵の來るのが見えたら——

甲從僕 お控へめされ我君、幼少より御奉公致した僕、只今から御留め申すは、何寄の忠勤と存じまする。

レガ 何をいやる、此犬が。

從甲 イヤ、夫人様の御願に御鬚があつたら、それを引ひしつても、お争ひ

申さねばなりません(向ひ)申し何となされます。

コ一 ヤイ主に向つて不屈奴。

とコ一、拔劍從甲同じく拔劍にて戦ふ事

從甲 サア御出なされ、御荊癖の冷めぬ中、どうなりとなされませ。

と從甲コ一に傷を負はせる

レビ えゝ其劍を此方へ——百姓でもこれ程には。

と劍を取り後より從甲に斬かける

從甲 あゝ殺された。我君、殘る隻眼(カロス)に御行末を見られぬやうにな

されませい、あゝ。

と從甲死する

コ一 あゝ、いかにも見られぬ様に致して呉れる(譯者曰く此間にコ一、クロ

科ありと)それ瞳が飛び出た、どうぢや、これでも見えるか。

クロ えゝ眞暗闇ぢや、ヤイ悴エドマンドは何處へうせた、こりやエドマ

ンド、父が耻辱を無念に思はゞ、此復讐を致して呉りやれ。

レガ 愚や逆賊、汝は汝に仇なす悴を呼びやるか、汝が叛逆の一伍一什を、

密告致したは彼ぢやわいの、其忠義者のエドマンドが、何て汝を可哀



相とも思はうぞい。

クロ おゝさては此身の不明、エッチャーこそあらぬ濡衣を着たるよな。え、神々も此身の罪を御宥恕あつて、彼が身の上を護つて下され。

レカ 誰ぞ此奴を門外へ追つ拂ひ、鼻で道を嗅ぎ分けて、ドーバー三界へ往なして遣れ。

從僕一人クロを伴ひ退場

ハテ、如何なされました我夫、どうやら御容子が。

コイ 少々怪我を致した従いて參れ夫人、彼の俄盲目を追拂つたら此奴(徒甲の屍)は糞溜へ棄てし遣れ、いやレガン、未だに止まぬ此出血悪い時に怪我を致したなア、手を引いてたもれ。

とコイレガンに引かれて退場

乙從僕 此様事をしても善いならば、己やもう何んな悪い事でも構はず爲る。

丙從僕 彼の夫人が無事に生存へて、盤の上で死ぬるなら、女といふ者はみんな夜叉になるだらう。

從乙 此方共はこれから伯爵の御供をして、彼の物狂の乞食(こじき)に、何處へても好きな處へ案内させうてはないか、狂人だからどんな事でも厭(いと)とは云はぬ。

從丙 そんなら汝先へ行け、己や御顔の創(くず)へつける様に、麻(あ)と雞卵(たまご)の白味を持つて後から行く、(當時金創の手當には)おゝどうぞ神様も、御慈悲を垂れさせて下さりませ。

と二人別々に退場

### 第四幕

#### 第一場 荒野

エツヂヤ一登場

エツ 此様に輕侮あなごられても、輕侮あなごされると知りつゝ、日を送るは、諂たらはれながらも、輕侮あなごられるには優まる身の上、其上不運たの谿底たに沈む上は、登る望こそあれ、最早落ちる憂はない。安樂の身の上には、悲みを見る恐れもあれど、苦艱の身には、どう轉んでも只だ身の幸さきを増すばかり。おゝ然らば風も吹け、風故に、不運たの谿底たに吹き落されし身は、吹き上げらるゝも、又風故、風に恨みも思もない。ヤ、其處へ參つた者は、

グロスター、一老翁に導かれて登場

ヤ、父上が、みすぼらしげな御有様で、おゝ、浮世や浮世、浮世に不思議の變有つて、吾人われら浮世を厭ふ心の生ぜずもあらば、老人おとしにはなりたうなし。

老翁 申し殿様、私は此八十年、御家重代の百姓でムりまする。

グロ 往きやれ、棄て、置け、折角の其方が親切、此身には何の役にも立たぬ、其方迄却て酷い目に遇ふであらう。

翁 ぢやと申して殿様には、行くべき路も御見えなさらず。

グロ いや此身には、行くべき路もなければ、眼も要らぬ。眼ありし時にこそ、躓つきもしたれ、満つれば兎角心驕り、缺くれば却て愼み深し。あゝいとしの悴やエツヂヤ、騙たされた父が痾癖かへの贅えとなつたか、命冥加に生存へても、一度此手で抱いて見たなら、此眼が又開いた程嬉しから

う。

翁 ヤア、其處に居るは誰ぢや。

エツ (自旁) あゝ悲しや、此上落ちやうもない、不運の齎底などとは云はれぬ

もの、今は又先刻よりも、一層辛い悲しい思ひ。

翁 物狂の乞食ぢやな。

エツ (自旁) 此上にも之に増す悲しい思ひをせぬとも限らぬ。齎底と思ふ間

に、其又底が見えて来る。

翁 こりや奴、何處へ行く。

クロ 何ぢや乞食か。

翁 乞食で、そして狂人でムりまする。

クロ 乞食を致す所を見れば、幾らか正氣もあると見えるな、昨夜の彼の

暴風雨の中に、拙者も其様な者を見たが、それを見て今更ながら、人間は虫ぢやと思ひ知つた。そして忽ち想浮べたは悴のエツヂヤ！。乍去其時は、まだエツヂヤ！が憎い最中。後から知つて悔めど詮もない。えゝさて腕白小僧が、蜻蛉を弄るやうに、人間も神様の翫弄物ぢやな。慰みに人間を殺すとは、神様も恨めしい。

エツ (自旁) ハテ、こりやどうした事であらう。それにつけても、自ら身を苦ませ併せて他を苦ませながら、此様に身を寝して悲嘆を暗まさせねばならぬとは何たる身の上。申し且那樣。

クロ 其奴は裸躰ぢやな。

翁 御意の通りでムりまする。

クロ 然らば其方は何卒これ往んで呉りやれ。乍去舊恩を思ふ心あら

ば、身共はドーバー指して行く程に後から此裸躰男に、何を着せる物  
を用意して、一二里先の處迄持参して呉りやれ。拙者は此男に案内を  
頼む積りぢや。

翁 飛んだ事を此男は物狂ひてムります。

クロ どうで狂つた此の世の中、狂人が盲人の手を引くに不思議はない。  
身共の云ふ通りに致せ。夫がいやなら其方随意に致せ。兎も角も早う  
往んで呉りやれ。

翁 そんなら私の一番美しい着物を持参致しませう、まゝよどうなるも  
のか。

と翁退場

クロ コリヤ裸躰男――

エツ おゝ寒己や寒己(白)えゝもう辛抱が爲切れぬわい。

クロ 此方へ来い奴

エツ (白)いやも少し辛抱せねばならぬ。アレ、御眼から血が流れる。

クロ 汝やドーバー街道を存じて居るか。

エツ 街道でも裏道でも、馬道でも樵徑でも御手のもの。此物狂ひは正氣  
を失したが貴君様は富人の子、どうぞ悪魔に憑かれぬやう。コレ聞か  
しやれ、此己には一時に、五匹の魔が憑いて居る。邪淫の魔には無言の  
魔、竊盜魔には殺生魔、それに澁面苦面の魔、但し當世は、御殿女中や侍  
女に、此澁面の魔が憑いて、鏡の前で顔付の稽固がムります。伊ヤ  
申し、お旦那様。

クロ サア此財布を取つて置け。汝や狂人になつたお蔭で、何のやうな難

儀でも笑つて通す。それに身共のやうな仲間が出来ては、幾らか諦ら  
めがつけ易からう。實に天道はかうありたい。飽食暖衣の輩は、汝等が  
天運を嘲笑ひ、我が身に覚えねばとて見て見ぬ振り。左様な者共を、一  
日も早う零落させ、身につまさせて呉れたいな。さすれば人間平等、貴  
賤貧富の差別もなく、萬人が萬人、何不足もなくならう。汝やドーバー  
を存じて居るな。

エツ 存じて居ります。

クロ 彼處には懸崖がある。削り立てた様な其頂は、危なげに大海を覗い  
て居るが、其崖端まで案内して呉りやれ。さすれば身共の身に着いた、  
金目なものを褒美に遣す。それから先は、もう案内は要らぬ。此身ぢや、  
そんなら御手を取りませう。狂人が御案内を致しませう。

エツ

と二人退場

### 第二場 アルバニー公爵邸前

ゴチリル、エドマンド登場

ゴチ これ迄の御見送り御大儀々々。夫につけても途中まで、妾か夫公爵  
殿が、出迎はれぬとは不思議な事。

オスワルド登場

お、其許か御前様は何處に。

オス 御殿に御在遊ばします。乍去御前様には甚う御變りなされました。  
敵軍上陸の儀を申上げましたる處、たゞ御微笑みなされたばかり。夫  
人御歸館の由を申上ぐれば、けしからぬとの御挨拶。グロスター殿の

叛逆御子息が忠義の一條を申上ぐれば、某を馬鹿者呼はり、見様が悪いとの御詞とかく從來御嫌ひ遊ばす物が御好になり、御好遊ばすものが御癪に障る御様子でムりまする。

（向ひ上）そんなら卿は、これで還つてたもれい喃とかく事なかれと願ふ、我夫の内氣な心故、其様な事も云はれるのぢや、身に逼る一大事を可成見ぬ顔に過さるゝ氣の弱さ、して途上話し合つた彼の事は、いつか願ひの届く事もあらうわいな、そんならエドマンド殿、卿はこれから歸つて、急ぎ軍兵を徴し集め、一方の旗本將、此身もこれから女性を止め夫に成り替らう心組、又これなるオスワルドは、心置なき親切者、以後は二人が中の文使、卿さへ身に向いた運に後込せずば、遠からず善い耳を聞かせうぞへ、夫迄の印には、サア、此品を着けて居や、あゝ

コレ何にも云ふまい。

と戀の紀念物（リボン）を興ふる事

そして、コレ、かうして（とエドに接吻しながら）ほんに此接吻に籠もる心の丈口に出して云はうなら、卿が魂は動揺せう、推量してたもれい喃、さらば。

エド 死すとも御情愛は忘れませぬ。

エド いとし、いとしのグロスタ殿。

とエドマンド退場

あゝ、同じ男と男でも、此様に違ふものか、あの様な殿御こそ、女性の情は受くべきなれ、今迄の阿房殿が、妾を女房呼はりは、其身にもなき潜在沙汰。

オス モシ、夫人、我君の御出でムりまする。

とオス云捨て退場

アルバニー登場

ゴテ さて、我夫の御出迎も受けぬとは、他かれ果てた此妾、

アル あゝゴテリル、暴い風が吹きつける、汝が面上の塵程も、愛しげのな  
いは汝の心、恐ろしい性質、生みの父御を等閑にする心根は、よもや何  
事にも尋常にしては居られまい。養分のある親木から、我と身を裂く  
若枝は、枯れ朽つる日も瞬く間。

ゴテ 其様な事、最早聞きたうもムりませぬ。阿房らしい御經文。

アル 聖賢の訓戒も、悪人には悪しく聞え、鄙しき者は鄙しき臭氣の他を  
嗅がぬ。コレ汝等の所業は何たる所業、人の娘ではなうて虎狼、コリマ  
何事を致した。現在の父御なり、結構な老人を如何致した。怒り狂ふ熊

てさへ、御年寄られた彼の御顔は、甜め廻しも致すべきに、残忍卑劣な  
舉動は、氣が狂うたか逆上せたか、深い御恩に預つた、コインツールは  
只だ黙つて見て居たか、其様な事を致して、天罰立ろに至らずもあら  
ば、人間界は大亂脈、互に肉を食ひ合ふこと、渡つ海の底に住むて、怪  
物にも變りはあるまい。

ゴテ 臆病者とは我夫の事、其御頬は打たれう爲め、其御頭は擲られう爲  
めに、附けて置くと見えまする。其御目は身の面目と、身の難儀の見別  
さへ附かぬると見えまするな。大悪を仕遂げぬ中に、罰を受けた悪者  
を、憫れがるは、愚人の所爲と、其處に御氣が附かれぬか。モン、陣鐘陣太  
鼓は、何處へお置きなされまする。佛蘭西王は既に軍旗を翻し、無人の  
地を行くやうに、兜の羽を靡かせて、是見よがしの陣構へ、それに好人

物の我夫は、ちつと坐つて善悪の御講義、ハテ心得ぬ、佛蘭西王が舉動など、仰せられても詮ない事。

アル コレ悪魔、自分の姿を見やれ。夜叉の夜叉面も、女の夜叉面程は怖うないわ。

ゴチ お、阿房らしや。

アル 鬼になつたか蛇になつたか、變り果てた汝の心に、まだ耻辱といふ事を知るならば、せめて顔貌までは異形のものとなさぬがよいぞ。え、此兩腕を、此胸に烹ゆる、血潮の爲すがまゝに任せたら、汝が肉も骨も引裂いて、すたくにせにやア措かぬ。正しく悪魔の汝ながら、女の皮を蒙る故、思ふ様にもならぬが残念。

ゴチ ハテ其御勇氣が――

使者登場

アル 何事ぢや。

使 お、御前様、コロンヲールの公爵には、御逝去なされてムリます。グロスター殿の残る片眼を、潰さうと致した時、御家來に斬られました其創で。

アル 何、グロスターの片眼ぢや。

使 御家來の一人が見るに見兼ねて、其御舉動を御留め申さう爲め、遂御主君に劍を向けし處、憎い奴と御立腹にて、夫人と御兩人にて御手討になされましたが、其時御自分も御受けなされた負傷にて、遂に御落命に及びましてムリます。

アル あ、其一事は天上に神明の在す確かな證據、此地上の罪の報いが、



左ばかり速かであらうとは、それにつけても、不憫なはグロスター、其片眼は失ひしか。

使 兩眼共に失ひましてムリます。さて夫人、此書面は至急の御返事をとの事でムリます。即ちコーンウナルの夫人より。

と書状をゴチに呈する

ゴチ (旁) 滿更悪くもない此音信、乍去妹も今は寡婦、そして可愛いエドマンドを側に置いたら、此身が折角の願ひも仇となり、あぢきない身の上となりはせまいか、其れさへなくば厭でもない此の消息、兎も角も讀んで返事をせうか。

とゴチ退場

アル して兩眼を抜かれし時、グロスターが悴は何處に居りしぞ。

使 夫人の御供をなされ、御館へ参りました。

アル いや館へは参らぬが。

使 いや参りましてムリます。某は只今途中で、彼が引還し行くに、出合ましてムリます。

アル して彼は、其騒動を存じて居るか。

使 存じて居ります。段ではムリませぬ。父の陰謀を密告致したも彼が業、夫人の御供を致して、其場を外しましたも、父の處刑を、存分に致させう爲めてムリます。

アル さて、不憫なグロスター、國王殿下への卿が忠義、予は嬉しく思ふぞ。此上は失ひし兩眼の仇は予が報いて遣す。コリヤ、其方は此方へ來やれ。もつと委しい様子が聞きたい。

と二人退場

第三場 ドーバー附近なる佛軍の陣營

ケント及び一紳士登場

ケン 佛蘭王には何故俄かに歸國致されたか其理由は御存じてムリませうな。

紳 何事か中途に棄てし出師せられたを後になつて思ひ出し、それで歸國せられたと見えるが、何れ國王親ら歸國致す程な國家の大事と相見える。

ケン して御名代の總大將には誰人を残し置かれました。

紳 即ち佛蘭國の元帥ラ、フラー將軍。

ケン 貴殿御持參の御書面を御一覽あつた時、皇后には何を愁嘆の御様子をお漏しなされましたか。

紳 いかにも皇后には書面を取り、某の面前で御一覽なされたが、折々涙をばら／＼と、美しい御頬の上に御落しなされました。其御有様せぐり来る胸の悲嘆を、ぢつと御制へなさるやうでムりました。

ケン おゝ然らば彼の書面が、御心を動かしたと見える。

紳 乍去御憤激と申す風ではなく、せき来る悲みと、其悲みを耐へやうとの御心が、御顔の上に解けつ、纏れつ、何れが美しいかと婀娜競べ、日光は射しながら雨降ることは間々あれど、微笑と涙の皇后の御顔に比べては及びもない。丹花の唇に含める微笑は、眼に湛へたる涙をば、素知らぬげに見えながら、其玉のやうな御眼よりは、眞珠のやうな涙

の零れ落つる風情悲みといふものも、映り合せが好い時は此上なう  
美しいものでゐるわい。

ケン して皇后には、何とか仰せられましたか。

紳 げに一二度喘ぎながら、父上父上と、さも胸苦しうに、つぶやかれ  
た上情ない姉君達、女の耻辱、姉君達、彼のケントが、父君が、彼の暴風雨  
に、彼の闇夜に、慈悲も情もないことか、など、御泣きなされ、神々しい  
御眼の中から、涙の露を御拭ひなされ、咽びながらも人なき室にて、御  
悲みを鎮めやうとの御心か、其まゝ御立ちなされました。

ケン 實に人間の心の善悪は、天上の星の廻り合せ、さもなくば一つ種一  
つ腹から左様に迷つた、子供の生れう道理が、ムらぬ。して貴殿には、そ  
れから後皇后に、御拜謁を致されましたか。

紳 否致し申さぬ。

ケン して又夫れは佛蘭王歸國前て、ムりましたか。

紳 否、後てムる。

ケン さて國王殿下には、此市へ御着なされましたが、御氣分の鎮つた時  
は、御潜幸の理由も思ひ出さるゝ御様子、但し姫君に御對面の儀は、逆  
も御承知なさりますまい。

紳 それは又何故で。

ケン 慚愧の念に、御身を責めらるゝ故て、御配分を奪ひ取り、あらぬ  
他國へ何うともなれと追拂ひ、當然御譲與あるべき等の、大切の御領  
國を、さもししい心の姉姫達に御譲りなされた、それやこれやに御心を  
惱まされ、我が御子ながら、愧かしさに、コルデリア姫には、御顔が合せ

の零れ落つる風情悲みといふものも、映り合せが好い時は此上なう  
美しいものでゐるわい。

ケン して皇后には、何とか仰せられましたか。

紳 げに一二度喘ぎながら父上父上と、さも胸苦しうに、つぶやかれ  
た上情ない姉君達、女の耻辱、姉君達、彼のケントが、父君が彼の暴風雨  
に彼の闇夜に、慈悲も情もないことか。など、御泣きなされ、神々しい  
御眼の中から、涙の露を御拭ひなされ、咽びながらも人なき室にて、御  
悲みを鎮めやうとの御心か、其まゝ御立ちなされました。

ケン 實に人間の心の善悪は、天上の星の廻り合せ、さもなくば一つ種一  
つ腹から左様に迷つた子供の生れう道理が、ムらぬ、して貴殿には、そ  
れから後皇后に、御拜謁と致されましたか。

紳 否致し申さぬ。

ケン して又夫れは佛蘭王歸國前てムりましたか。

紳 否、後てムる。

ケン さて國王殿下には、此市へ御着なされましたが、御氣分の鎮つた時  
は、御潜幸の理由も思ひ出さるゝ御様子、但し姫君に御對面の儀は、逆  
も御承知なさりますまい。

紳 それは又何故で。

ケン 慚愧の念に、御身を責めらるゝ故てムる、御配分を奪ひ取り、あらぬ  
他國へ何うともなれと追拂ひ、當然御譲與あるべき筈の、大切の御領  
國を、さもししい心の姉姫達に御譲りなされた、それやこれやに御心を  
惱まされ、我が御子ながら愧かしさに、コルデア姫には、御顔が合せ

たうもないのでムります。

紳 あゝ御可哀しい事ではある。

ケン アルバニール、コーンフォール兩公の軍勢に就きましては何ぞ御聞き  
込みなされましたか。

紳 只今進軍中との事でムる。

ケン 左様でムりますか、然らば貴殿を、リア殿下の御側へ御案内申しま  
す故、御介抱申上げて下さりませ。某は深き仔細有つて、今暫く素性を  
隠して居りますが、やがて何者なるか、正躰を現す時が参らば、恐ら  
く貴殿とても、かう某を御信用なされた事を、御後悔はなされますま  
う。さうぞ何卒御同道下さりませ。

と二人退場

第四場 同前 天幕の中

コル デリア、醫官、及兵士大勢旗鼓を携へて登場

コル あゝほんに父上ぢや、ハテたつた今の先、荒海の様に暴れ廻る、御狂  
亂の御姿で、薊蒲公英、蕁麻、其外種々、麥島の中に咲いて居る、名もな  
い草花を御頭に挿し、高らかな御鼻唄で、彼處を御通行なされたに、此  
上は一隊の軍兵を繰出だし、生茂れる麥島の中を、隈なく尋ねて、早う  
此處へ御連れ申しや。

と命を呑みて一人の役人退場

あの亂れた御心を如故には、名醫のとてもならぬかいなう、御治し申  
す者があつたなら、此妾が身に附く者は、何なりと遣らさうもの。

醫 いや御療治の道はムリます。御睡眠こそ、自然の療法でムリするが、其御睡眠が御不足なされます。然るに御睡眠を促す薬艸がムリます。此薬艸には、疲れた眼を閉ぢしむる、不思議の力がムリする。

コル お、此地上に、ありとある不思議の薬、秘密の草を、此涙で生したい、そして御病氣を治したい。それにつけても、御狂亂の餘り、御生命に若しもの事がない中に、早う御尋ね申してや、正氣といふ、取る舵のない今の御身、氣遣はしい事ではある。

使者登場

使

御注進でムリます。英國の軍勢、此方を指して寄せます。

コル

夫は前以て知れた事、此方にはちやんと準備があるわいなう。お、

いとしの父上、妾が此度の出陣は、たゞ父上に逢ひたい爲め、夫故にこそ我夫佛蘭王も、此身が嘆きを不憫と見て、此様な軍をも起されまし。た、さら／＼戦争に勝たう、國を取らうなどいふ、大望故ではムリませぬ。たゞ父上愛しさ故、父上の御難儀を御助け申さう爲めばかり、お早う御聲が聞きたい、御顔が見たうてならぬわいなア。

と一同退場

### 第五場 グロスター居城内の一室

レガ、オスソルド登場

レガ 乍去縁兄君の軍勢も、最早勢揃を致したか。

オス 致しましてムリます。

レガ して御自身が大將で、

ナス 様々に御勧め申し、漸う御出馬なされましたが夫人の方が却つて  
武勇に入らせられまする。

レガ さて此方のエドマンドは、其許の御主君と彼の節御館で御對面致  
さぬとか。

オス 致されませぬ。

レガ ても妹より彼への書面は何事を申し越したのであらう。

オス 某も存じませぬ。

レガ 生憎やエドマンドは、大切なる用向にて折しも他行致した所、グロ  
スターの眼を抉りながら生かしてゐいたは甚い粗漏、行く先々で、人  
の心を動かして、我等の敵を作らぬとも申されぬ。たしかエドマンド

の行きやつたは、父の難儀を見るに見兼ね、寧ろ盲目の闇の命を、なき  
ものにせう心組、又敵軍の様子をも探らう爲めてあらうわいの。

オス 然らば某は、此御書面を携へ、御後を追駈けずばなりません。

レガ 當方の軍勢も、明日は出發の手筈、其許も同道して行きやいのう。一  
人路は危嶮わいの。

オス それは成りませぬ、此儀については、夫人よりの堅い命令でムリま  
した。

レガ 姉上にはエドマンドへ、何御用あつて其御書面、其許が口づからの  
傳言では届かぬか、定めてそれは——いやどうも解せぬわいの。コレ  
其許は善い者ぢや、そつと妾に封を切らせては給もらぬか。

オス そればかりは、縦令何のやうな事が——

レガ いやさ姉上が縁縁兄君を御嫌ひ遊遊さすことはちやんと承知。それに此程御出の節、それは、彼のエドマンド殿へ横眼色眼、ハテ其許は姉上の腹心ぢやな。

オス 何此某が。

レガ 何事も承知の上でいふのぢやぞや。それに相違のない其許、よういふて聞かせうぞ。妾が夫公爵には御遠逝。エドマンド殿と妾とは、少々話し合ふた事もある程に、姉上の御手よりも此手の方が早いぞや。それで大畧大畧は推量しや。さて彼君に逢うたなら、委細話して見るがよい。又姉君にも御話申し、叶はぬ願ひは棄てる様、よう御思案遊ばせと申上ぎや。そんならこれでおさらばぞや。序ながらあの謀叛人の、グロスグロスターが在家在家を聞き出し、殺した者には、褒美は望み次第といふ事を覺

えて居や。

オス 其儀は何卒某が、是非功名致したい。然らば某が心根を、御覽に入れる事も出来ませう。

レガ そんならこれで。

と二人退場

第六場 ドーバー附近の片田舎

クリスタター及び百姓の扮装したるエツァヤー登場

クロ 彼の山の頂上へは、何時着く事であらうなう。

エツ ハテ今其山を登る所、さて、坂路は骨が折れる。

クロ いや道は至つて平な様ぢやが。



エツ イヤ恐ろしい險阻な事ぢや、アレ浪の音が聞えませうが。  
クロ いやちつとも聞えぬ。

エツ そんなら御眼が暗くなつたので、御耳も遠くなつたと見える。

クロ 實にさうかも知れぬ、イヤ汝の聲は少々變つたな、そして前の様ではなく、整然とした詞で物云ふ様になつたは不思議。

エツ それは間違ひ變つたのは衣服ばかり。

クロ どうも口のさゝ振が上がつたやうぢや。

エツ サア、此處ぢや、立留まつた。何と下を瞰ると恐ろしや、目が廻る。途中を飛んで居る鳥共が、漸と甲虫程に小さう見えるや、丁度真中頃で岩菜を採つて居る者がある。危い商賣もあつたものぢや。五体が頭程の大きさにも見えぬ位、渚を歩いて居る漁師の姿は、鼯鼠程もあ

らうか、向ふに泊つて居る大船は解舟のやう、解舟は全て浮標のやうて見落す程ぢや、浪の真砂子に砕けかゝる大浪の音も、餘り高い響きはせぬ。いやもう見ぬ、頭がぐらついて目が廻つて、真逆まに落ちさうぢや。

クロ コレ汝の立つて居る所へ、身共を立たせて呉りやれ。

エツ そんなら兩手を出した。それもう其處から崖端まで一尺もない。己や何を貰つても、此處で跳ねるのは眞平ぢや。

クロ 手を放して呉りやれ。ソレも一つ財布を遺す。此中には、貧乏人には有り難い程の寶がある。どうぞそれで繁昌致すやうに。サア彼方へ行け、還つて呉れ、歸る足音を聞かせて呉りやれ。

エツ そんならこれで、御機嫌よう。

ケロ 汝も達者で。

エツ (旁)かく父上を欺き、自暴自棄の御心を弄ぶやう致すのも、畢竟其御心を御治し申したい爲めばかり。

ケロ (跪)諸天諸神もみそなはせ、某は只今此世を辞し、身に纏ふ苦難をば、御覽の如く心静かに振り棄てます。いつまでも此の如き苦難を受け、大御心の爲すが儘に、ひたぶる従ひまつるとても、某が生命は、只だ蠟盡きたる蠟燭の心の如く、ふすくと燃え落つるばかりで、ムリませう。又若し悴エツチャ、此世に生存らへ居らば、何卒彼が身の上を護らせ給はんやう祈ります。イザ奴、これて早う還つて呉りやれ、還りますく、さらば

とこれにて、ケロ身を投ぐる科ありて倒れ臥

し、一時氣絶の體。

とはいふもの、彼の様に御生命が棄てたいと思ふ矢先、墜ちたつもりで、眞實に御生命を失さうも知れぬ。若しこれが父上の、思つて居らせらるゝやうな場處ならば、今の一跳で御落命なされた所——  
(此度は別人)コレ、申し、旅の人如何なされた、聞えましたか、何とか一言仰せられい。——實に此まゝ御果てなさらうも知れぬ、いや御氣がついた様子、申し如何なされました。

ケロ え、往きやれ、死なして呉りやれ。

エツ 糸遊か、鳥の羽か、蒸氣で、いもないならば、あの様な高い處から跳下りれば、鶏卵のやうに、粉微塵に碎けうもの。それに貴所は、息は通ふ、五臓はそつくり、血も出さず、口もさかれて達者なもの。眞逆まに落ちて來

たあの長町場は、帆樫を十本二十本維まいても達たきはせぬに、さりとは不思議な御生命ぢや。もう一言仰有つて御覽じませ。

クハ 乍去身共は眞實墜ちたに相違ないか。

エツ 此の懸か唄うたの頂上から、眞逆まがさかまに落ちました。先づ彼處を見上げなされ。上に鳴いて居る道がの雲雀も、聲も聞えず姿も見えませぬ。マ、一寸見上げて御覽じませ。

クハ 口惜しい事に身共は眼がない。さて、死んで苦艱を逃がるゝといふ事もならぬとは、いかに薄命の者なりとも、自害を致せば、いかなる暴主の怒りをも、道れ、いかなる暴威をも、摧くだいてこそ、世の中には幾分の慰藉なぐさありと申すものぢやに。

エツ サア御手を取ります。御立ちなされ。どうなされた。御脚ごあしに感あは覺えがム

りますか。それ御立ちなされた。

クハ あり過る程感あは覺えがある。

エツ 不思議とも何共申様がない。彼の懸か唄うたの上まで、貴所あなたに従したがいて参つた者がムりました。が彼は何者でムりますな。

クハ 彼は見るも氣の毒な乞食ぢや。

エツ 此私わたくしが下から見ますれば、兩眼は満月を懸けたやう、鼻は幾百千とも知れぬやうに數多く、角つるぎと角とはもつれあひ、絡みあひて、荒海のやうにうねつて居りました。が彼は何でも魔でムリませう。貴所は餘あまッ程な幸福しあわせ者。人間業に叶はぬ事を遊ばされた。神様に、御生命を拾はれたのでムリませう。

クハ あゝ今こそ想出した。これからは身の苦艱を、何時迄も堪へ忍んで、

これで宜いといふ迄生きて居やう。汝が云はるゝ其悪魔を、身共は人間とばかり思つて居たが、實に其者は「悪魔々々」と口癖に申して居た。彼處へ拙者が参つたも彼奴が案内。

エツ 御氣を鎮めて心を安らかに御持ちなされ、いや何人か此處へ御來なされた。

リア 野花を以て身を掩ひたる奇なる扮装にて登場

ヤア 此様な御扮装を遊ばすからには、何れ正氣の御沙汰ではあるまい。

リア いや、予が貨幣を鑄いたとて、彼奴等が何うするもので、予は國王ぢや。

エツ あゝも痛はしい御有様。

リア 其儀に就きては、人力よりも天力ぢや、それ給料を遣す。其奴は弓矢の達人、案山子程の弓を引く。どうぢや、今一寸三尺斗りの矢を射ては、見せぬか。アレ、其處へ鼠が、コレ靜かに、此牛酪を餌にして捕つて遣らう。サア、甲手を投げた、いかなる勇士でも相手を致す。戦を執れ物共、あゝよう飛ぶを、集中つた、的中ぢや、シューッ、いざ合言葉は。

エツ 「匂へる花」(合言葉はと聞はれ、即ち合言葉の振にて出鱈目を云ひしなり)

リア 通れ。

クロ 聞き覚えのある御聲ぢや。

リア 何ぢや、其方はゴテリルか、白い鬚が生えて居ても、イヤ、犬のやうに、手に媚び諂つた奴原が、まだ黒いのも生えぬ時から、白い鬚が生えて

居ると申し居つた予が「唯」と云へば「唯」と申し「否」と云へば「否」と申すとは不敬な奴原。一度び身を知る雨に此身を濕ほし、吹く風に齒ぎしりを噛み留れと命じても留らぬ雷を見た時に、初めて悟つた彼奴等の胸の中、初めて正躰を喚ぎ別けた。ヤイ、彼奴等は虚言家ぢや、予は何者にも犯さるゝことなき、一天萬乗の君ぢやと申し居つたが、悉皆虚言ぢや、予とても辨には犯される。

グロ 其御聲癖にちやんと肥臆がある。國王殿下では在さぬか。

リア 左様ぢや、寸分國王に相違ない。見やれ、一度眼を見開けば、臣民悉く恐れおのゝく。其者の命は宥して遣す。犯罪の筋は何事ぢや、私通ぢや、然らば命は取るに及ばぬ。私通は死罪でない。鷓鴣もそれを致す、あの小さい銀蠅も、予が面前を憚らぬ。色事結構、グロスターの隠し子は、予

が嫡出の女等よりも遙かに孝心に富んで居る。予は兵士の不足に苦み居る。幾らでも子を拵へるがよい。見やれ、彼の向ふから来る笑顔の女房を、あの顔を見れば、定めて貞女と思ふであらうが、あれは賈貞女、表面ばかりは猥らな話にも首を振る。去りながら淫樂好の舐ても、伺料のよい馬駒でも、實は彼の様に烈しうない。首の方は女ぢやが、腰から下は畜生ぢや。帯から上は神のもの、帯から下は魔のもので、地獄がある。開がある。硫磺の燃ゆる穴がある。焼ける。爛れる。臭ふ。腐る。え、厭らしや。コレ薬屋、麝香を呉りやれ。胸持を治したい。ソレ代物を遣す。

グロ 其御手に接吻を御許し下され。

リア 先づ此手を拭うてからに致さう、地獄臭い。

グロ (リアの手を接吻し) 漢抜のからの御玉躰。此大千世界とても、いつか

は此様になるであらう、申し某を御存じなされますか。

リ ア おゝ、汝の眼におぼえがある。どうぢや予を睨んで見やれ。いやさ眼のない戀の神、汝が秘術を盡すとしても、予は戀にはかゝらぬわ。此決闘状を讀んで見やれ、せめて書振りを見るがよい。

グ ロ 其文字が日輪のやうに光るとても、某には一字もえ讀めませぬ。

エ ッ (旁) 現在此目で見ぬならば眞實とは思はれぬ御有様、げに腸も千切るゝ様ぢや。

リ ア サア讀んで見やれ。

グ ロ 何と眼の皮で讀めと仰せられまするか。

リ ア おゝ、其處ぢや、眼には玉なし、財布には錢なし、か眼は重體、財布は輕し。乍去世間の有様は見ゆるであらうな。

グ ロ それは勘て見えまする。

リ ア 何と汝は氣が狂うたか、眼はなくとも、世間の有様は見えるもの、ハテ耳で見やれさ、アレ見よ吟味役が小盗人を拷問致して居る。コレ聞け、彼等兩人が居場處を替へたなら、何方が吟味役で、何方が盗人か判るまい。汝は乞食が百姓の飼犬に、吠えられる所を見た事があるか、どうぢや。

グ ロ ムりまする。

リ ア そして其乞食は逃げたであらうな、即ち其處に役人の係が見える、犬と雖も上に立てば、權威を笠に人間を逐ふ、えゝこゝな村役人、其非道な鞭を措いたく、何故其賣女をなぐりやるぞ、打ちたくば自分の背を打ちやれ、汝は其女の罪を責むるやうぢやが、其所業こそ却つて

罪ぢやわ。小盗人を刑に處する役人こそ國財を奪ふ大盜賊纒縷を着れば、小さい罪咎も顯れるが、役人の立派な禮服には、いかなる大罪も隠れて見えぬ。金を着せれば、何の様な惡事でも、吟味の槍は手もなく折れる。纒縷で包めば、小人鳥の糞糞でも直ぐ透る。夫故世の中に罪人はない、役人の責める罪人は罪人ではない。予が保證ふぞ、役人共の嘴に封を付ける力のある、予の詞に満足致せ。さて汝は玉眼を入れて世を欺き、見える振して過ごすが宜い。ツァー、予が靴を脱いで呉りやれ、もつと強く引いたく、さうぢや。

（旁）お、滿更御譚言ばかりでもない、狂氣に交る正氣の御言葉。

（リ）ア、汝や予が身の上を泣きたいなら、予が眼を取つて泣け。予はよつく汝を承知致す。汝が名はグロスター、何事も忍べ。人間は泣いて此

世へ來るものぢや、初めて娑婆の臭氣をかいた時、皆なちぎやア、と泣くではないか。汝に少々云うて聞かす事がある。コレ聽聞致せ。

（ク）ア、あ、何たる御有様。

（リ）ア、抑も人間生るゝ時の初聲は、此愚かしき大舞臺へ、登りしことを泣くのぢやぞや。イヤ、此れはよい朝子ぢや、此朝子を作る毛氈を以て、馬の蹄を包むはよい思ひ附。予は試して見やう。さて彼の婿共の側へ忍び寄り、彼奴等を思ふさま、斬つて、斬りまくれ。

一紳士從者を伴ひ登場

紳 お、此處に御在なされた。御抑へ申せ、申し殿下、いとしの御姫君には――

（リ）ア、コレ誰ぞ助けて呉れぬか、何ぢや生擒に致すと、な、予は運命の玩弄

物と生れた身ぢや、酷い事を致して呉りやるな。贖回金を遣さう。ヤア  
く 醫師を呼べ。予は腦天迄打破られた。

紳 何事でも御望次第でムりまする。

リア 誰も助けて呉れぬか、棄て、置くか、又此眼に泣かせうとか、此眼を  
如露の代りにして、秋の塵を濕させうとか。

紳 申し殿下――

リア イヤ予は悪びれず死ぬるであらう。花郎のやうに潔よく。何ぢや、最  
早めそく泣きはせぬ。コレく、予は國王ぢや、汝達は承知の上か。

紳 いかにも國王殿下、某等一同は殿下の臣民でムりまする。

リア それでこそ頼もしい、いやさ捕へるなら驅けて来い。サアくくく。

と走りながら退場、従者等後追懸つ

退場

紳 縦令下司下郎の身にしても、痛ましかるべき御有様。況して一天萬  
乗の御身、申様もムらぬ。乍去彼處に在す一人の姫君、二人の姉姫故に、  
不運の御身とならせられながら、御心優しいのを御有ちなされます  
る。

エツ 申し御待ち下され。

紳 何用なるか急いで呉りやれ。

エツ 戦争があるとの取沙汰に就き、御聞き込みなされた事はムりませ  
ぬか。

紳 いかにも、其取沙汰は、眞實の事ぢや、苟も耳あるものは、それ聞かぬ  
者はあるまい。



エツ 乍去敵軍は何處迄寄せましたか、何卒御話し下さりませ。  
神 最早や手近迄差迫り、速かに推寄せ参る様子、敵の本陣の顯れるは、  
今か〜と相待つ所ぢや。

エツ 忝うムります、それだけ承れば満足てムります。

神 皇后には、去る仔細有つて、此處に御逗留あれど、御軍勢は既に出立  
に及びし次第。

エツ 有り難うムります。

と神退場

クロ 神々、何卒此身が息の根を御留め下され、又々間違つた心を起し、御  
許可をも待たず自害など、思ひ立たせて下さりますな。

エツ 御老人、よく御祈りなされませ。

クロ さて、汝は一體何者ぢやな。

エツ 打續く不運に鍛へられ、我が身の難儀に教へられて、人の難儀を身  
に泌みて見る哀れの者でムります。サア御手を御出しなされ、何處ぞ  
へ御案内致しませう。

クロ 忝ない、上天の御恵みも、何卒汝の身に振り懸るやう、祈り居るぞよ。

オスワルド登場

オス ヤア懸賞のついた白髪首、此様な幸な事はない、汝が其盲、目首は、拙  
者が立身出世の手掛り、コレサ、まわり合せの悪い叛逆人、早う懺悔を  
致すがよい、汝の一命を申受くる、劔は鞘を出て居るぞよ。

クロ それこそ却つて望む所、何卒しつかりと斬つて呉りやれ。

とエツがヤー中に入り差留むる

オス ヤア大膽な士百姓、折紙附の逆賊を、疵ひ立て致すか、退れ、聽かずば汝も、同様の災難に逢はせて呉れうず、サア其手を離せ。

エツ いんにや、そねいな事で此手は離されぬ(百姓の言葉を)

オス コレ離せ、離さにやア命を取るぞ。

エツ コレサ御役人御前様は御前様の道を行くが宜い。人に構ふ事があるものか。そねいな嚇文句で、此命が取れるものか。コレ此老人の側へ寄るてぬい、退いたく、それが厭なら御前様の頭と俺が棒手切と何が強い、試めして呉れべい。ドリヤ、さつさと埒を明けやうか。

オス 黙れ士百姓。

エツ え、此奴疊んで呉れる。サア来い、打つて来い、怖くもぬい。

と二人斬合ひエツゲヤ一遂にオスを倒す

オス ちえ、拙者を殺し居つたな。コレ奴かうなつては恨みも恩もない。此財布を取つて置け、そして末長く繁昌で暮したくば、拙者の屍骸を埋めて呉りやれ。又拙者の懐中にある書面をば、グロスターの伯爵、エドマンド殿に届けて呉りやれ。英吉利方へ往つて、尋ねれば判るであらう。あゝ、悲命の最期で死ぬるとは、あゝ。

とオス息絶ゆる

エツ 此奴は兼ねて見知れる奴、主と頼む夫人の機嫌氣稜を取り、悪事とあらば、何事に寄らず御扶助を致す不届者。

グロ 何ぢや、死にやつたか。

エツ モシ御老人、貴方は其處で御休息なされませ。私は此奴の懐を探して見ませう。今申した書面といふは、何ぞ役に立つかも知れぬ。あゝ、全

く息が絶えたな。處刑に懸けて殺さなんだが残念だ。ドリヤー一讀致さ  
 う。許せ封を切るぞ。妄りに開封の罪は、見違がして呉りやれ。敵の心を  
 知らう爲めには、其胸をも裂く習ひ。書面の封を裂くは、まだしもの事  
 ぢや(出して書面を取)

さ候へば契り交はし、言の葉の末忘れ給ふな。彼の人を亡き者に  
 せむ機會は澤にあらむを、御心だに固くば、思ひを遂ぐべき時、も處  
 もなくてやは、彼の人若し軍に勝ちて歸り來ば、何事もたゞ空とな  
 り侍らむ。此身は檻禁の身となりて、我が帳臺の中は、即て我が獄屋  
 ともなるべくや。早う厭はしの人の側より、此身を救ひ給へ、さてそ  
 が報いに、御身早う其席に直り給へかし、かしく。

懐かしの君が行末の妻

ゴチリル

あゝ測り難きは女心。明主の聞え高き夫の君の生命を取らむ陰謀。さ  
 て其代りに舍弟を、さては左様な不義者の文使であつたるか。え、此  
 砂の中に埋めてやれ。此上は折を見て、此書面をば、命を狙はるゝ公爵  
 殿の、一見に備へやう。此奴が最期の有様と、使命の趣を言上致し置く  
 は、公爵殿の御爲めてあらう。

ク  
 國王殿下は御狂亂、それに此身は確乎として、身に餘る悲みを、何時  
 迄も感えるとは、さても頑固な胸ぢやなア。寧ろ狂亂致したい。然らば  
 此心中の悲みも消え、胸に餘る嘆きも、亂るゝ思故に、何時しか忘れ果  
 てられうに。

と太鼓の遠音聞ゆる事

エッ サア御手を引きませう。どうやら遠く太鼓の音が聞ゆる様子。御老人、某が知己の家へ、御案内申しませう。

と二人退場

### 第七場 佛蘭軍陣營の天幕内

コル アリア、ケント、密官、及一紳士登場

コル お、懐かしのケント殿。此大恩はどうして酬いたら宜からう。短かい妾の一生では、酬い切れる望もなし。どの様な事をせうとて、物足りない心地がする。

ケン 某が心中の誠を御認め下されば、それこそ何密の御恩賞さて、只今某が申上げましたは、露詔りのなき有のまゝ、一分一厘の懸引もムリ

ませぬ。

コル 先づ、其服装を改めてたもれや、それを見るにつけても、今迄の難儀が想ひ遣られて心苦しい。何卒それを着替へてたもれ。

ケン イヤ御免あれ、某が只今正體を現しましては、折角の目的が外れまする。夫れ故時節到来、某がもう宜いと思ふ時迄、何卒某がケント奴ぢやとは、御存じない體に御心得下さらば、忝なう存じまするてムリませう。

コル そんなら其様に致して置かう。(密官)して國王殿下の御容態は、

静かに御眠みなされます。

コル どうぞ神々の御力にて、攪亂れた御心の破綻を早う治したいもの、子故に狂つた御胸の絃の調子外れを合せたいもの。

最早御目を御覺まし申しては如何でムりませう、十分に御眠みな  
されました。

卿の忠案に任せる程に、卿が宜いと思ふ様に致すがよいして御召  
物の召換は、

リア眠れるまゝ、轎に乗り従僕共にかづがれて登場

御熟睡中を見計らひ、新しい御召物に、召換へ進らせましてムりま  
する。

姫君、只今御起し申します故、もつと御側に近う。必ず御正氣に  
御還りなされたに相違ムりませぬ。

嬉しいわいの。

と音楽の聲起る

どうぞもつと御側へ、そして音楽をもつと賑やかに。

あゝいとしの父上、どうぞ妾の唇へ、不思議の靈藥を塗りつけて、そ  
して二人の姉君故に、御受けなされた創痕を、此の接吻で直して上げ  
た。

げにお優しい姫君の御心。

たとひ生みの父御でないとも、此白い御頭を、哀れとは見なんだ  
か、これがまゝ、暴風雨に曝される御顔かいなう、雷の鳴渡る、電の閃め  
き渡る、凄く恐ろしい真夜中に、野中に立たれる御身かいなう、軍の斥  
候に出ればとて、頭に兜は被らうもの、此身を咬んだ、憎い、狗なり  
とも、其様な時には、一夜は軒下に明かさせるが人情、それに父上は、棄  
てられた乞食と、ひさくるしい豚小舎の中に、糞屑を被いて御凌ぎな

されたげな御正氣と一緒に御命迄御失しなされなうだが尊ぞ不思議  
議おし目覺遊ばした何とか申上げて見や

先づ御妃からが御順當でムりまする

申し父上様如何遊ばしました如何でムりますな父上

魂魂ぢやが予は火の車に繋がれて鉛を鎔かした様な涙故我から身を焦す身の上ぢや

申し妾の顔に御見覺えは

其方は魂魄ぢや何時死にやつた

まだ容易に御正氣には

まだよう御目が覺めませぬ故暫く此儘にして御置き申すが宜し

うムりませう

予は今迄何處に居たさて又此處は何處であらう此の朗かな日の光は薩張り仔細がわからぬわい生存へて又此様な日の目を見るならば悲しうて死ぬるであらうイヤ何というて宜いやら少しもわからぬ此れは予が手であらうかどれ試して見やうかう留針を靡れば矢張りえら／＼とこたへるさて今我身の有様が確と知りたいたいものぢや

妻の顔を御覽遊ばしませそして其御手をかう翳して此身の祝福を御祈り下されハテ其様に御膝をおつきなされませすな

何卒此身を弄つて呉りやるな予は愚かなる一老翁ぢや當年取つて八十歳そして正直に申せばどうやら心が正氣でない卿の顔にも

これなる男の顔にも、見覚えのある心地が致せど、それとても當てにはならぬ。先づ此處は何處なるかも判らぬに、どう考へても、此服装に肥臆がない。昨夜は何處で過ごしたか、それさへも思ひ出せぬ。コレ笑つて呉りやるな、何うやら此婦人は、女のヨルデリアの様に思はれてならぬ。

ヨルデリア あゝ、そのヨルデリアでムります。何ぢや涙を流し居る。コレ泣くな、毒を持參致したなら飲んで遣らす。汝が予を愛せぬは承知の上ぢや、汝が姉達は恨もないに、此父を散々の目に逢はせた。まして汝は少々恨がある筈。

ヨルデリア 何の御恨がムりませう。  
ヨルデリア して此處は佛蘭西國か。

ケン いや御本國でムります。

リア 虚言を申すな。

ヨル 御安心遊ばしませ。御覽の通り御狂氣は御鎮まり遊ばされました。なれども従來の経過を、餘り精しく申上げるは、御爲めてムりませぬ。彼方へ御連れ申してもつと御沈着さ遊ばす迄、御心を騒がせぬやうになされませ。

ヨル 父上様彼方へ御出て遊ばしませぬか。

リア コレ勘忍して呉りやれ。昔の事は忘れて呉りやれ。予は老ぼれて、たわいもない痴者ぢや。

とリア、ヨルデリア、醫官及び従者等退場

紳 さてコーンワール公殺害の風説は眞實でムらうか。

ケン 眞實でムりまする。

紳 然らば公に代つて、臣民統御の任に當る者は何人でムるな。

ケン 風説によれば、グロスター殿が妾腹の子と申す事でムる。

紳 某が承りましたには、グロスター殿の嫡子エッヂャーには、追放の身となつて以來、ケントの伯爵と共に、日耳曼國に滞在致すとの事てムる。

ケン 風説は變り易いもの、餘り當にはなりませぬ。イヤかうしては居られませぬ、英國方の軍勢次第に近寄り参りまする。

紳 定めて大激戦があるてムらう、然らばこれにて。

と紳退場

ケン 今日こんにちの戦争こそ、拙者が胸中の計略の成敗を定むる運試うんしし、ハテ氣

遣はしい事ではある。

と退場



### 第五幕

#### 第一場 ドーバー附近なる英軍の陣營

エドマンド、レガン、役人兵士等旗鼓を携へ登場

エド 其方は公爵の御陣へ参り、此程の御計略を、彼の儘御用ひあるか、或は何ぞ仔細有つて、御取替なされるか、其儀確と承つて参れ。随分と御心の變り易い、御氣の定まらぬ御方故、確と致した所を承はつて参れ。

と此命を受けたる役人退場

レガ さて姉君よりの御使者(オクス)は、どうやら殺されてもした様子。

エド げに其様な事かと思はれます。

レガ イヤ、嗚ゆかしの人妻が胸の中は承知の筈なりや、隠し立てを致さ

ず、あからさまに云うて聞かしや、卿はアノ姉君を、心に思うては居やらぬか。

エド たゞ夫人の御姉君と、敬ひ奉るばかりで、ムりませぬ。

レガ てもあらうが、公爵の自妻を忍ぶ、禁制の鬨(しご)の中まで、足踏入れはせぬかいな。

エド 其様な御邪推は、御人品(ごじんぴん)に拘はります。

レガ どうも姉上の腹心で、何から何迄、打明け合ふ仲ではないか、疑はしうでならぬわいの。

エド 誓つて其様な事は、ムりませぬ。

レガ え、見るも厭(いと)な彼の姉上、決して親しうしてたもるなや。

エド 御疑ひ遊ばしますな、ヤア御覽あれ、噂の主が御夫(ごむ)の君公爵と、御同

道にて御來臨なされました。

アルバニー、ゴチル及び兵士等旗鼓を携へ登坂

ゴチ (自旁) たとひ戦争に負ければとて、妹風情に彼人を横取せられてよいものか。

アル レガン殿御機嫌克うて祝着く。エドマンド殿承れば國王には、末姫君の御陣に赴かれ我等が政道に兼て不満の者共が御供を致し参りしとの事かく申す拙者は、義我に在らざれば戦に勇なること能はず、此度の出陣とても、外寇の侵入を防がむ爲め、滿更無名の師とも思はれぬ、國王殿下の御勢に、弓を引く譯ではさらくなく。

エド げに天晴れなる御言の葉。

レカ 其様な御講釋伺ひたうもムりませぬ。

ゴチ イヤく、何は兎もあれ力を協せて敵に當るが專一、内輪喧嘩今茲て彼是云はぬがよいわいの。

アル されば差迫る戦の手配り、老功の古強者共と協議致さむ。

エド 然らば某は、早速御陣營に伺候致すてムりませう。

レカ 姉上様御一緒に参らうではムりませぬか。

ゴチ いやそれは。

レカ それが宜しうムります、サアく何卒御一緒に。

ゴチ (自旁) オホく、其謎は承知ぢやわいの——そんなら一緒に参らうか。

と一同行きかゝる時エツガヤ一微服して登坂

エツ (アルの側) 下賤の身をも厭はず、恐多い事ではムりまするが、一言申上げたい事がムりまする。

アル (一同上) 拙者は後から参る程に、先づ〱御出やれ。(エツに) 申して見やれ。

とエドマンド、レガン、エチリル、役人、兵士  
従者等退場

エツ 戦場へ御出馬ある前、何卒此書面を御披見下され。若し御勝利となりまじたらば、此書面の持参人を、喇叭を以て御呼び出し下さりませ。かく申す私は、見る影もない男では、ムりますれど、書中の赴の詐りならぬを、證明さむ爲めには、何時にても罷り出で、何人の御相手をも辭みませぬ。若し又萬一御敗北とある時は、君には此世の御運も既やそれまで、自然君への陰謀も、立消えとなりまします。さらば何卒御運めてたく。

アル コリヤ、披見致す迄待つて居やれ。

エツ そればかりはなりませぬ。若し其時が参りし上は、軍令使を以て御呼出し下され。然らば早速罷り出ますで、ムりませう。

アル 然らば参れ。此書面は目を通して置く。

とエツ、ゲヤ、退場

とエドマンド、登場

エド 早や敵軍が見えます。御軍勢を御集めなされませ。これなる書付は、敵軍の真相を、問者を以て探り集めしもので、ムります。何はしかれ、急ぎ御仕度の程、偏に願上げます。

アル ぬかりなく手筈を致すであらう。

とアル、バニ、退場

エド ハテ契りをこめた姉妹二人互に嫉妬の角を生し、蛇蝎のやうに惡み合ふ。さて何れを取つたものであらう、いつそ雙方諸共にか、但しは一人を撰取らうか、それとも雙方を棄てやうか。とはいへ雙方生存へ居ては、何れに親むことも成らぬ。未亡人殿に近しうすれば、姉のゴテリルは狂亂と參る。それかというて、歴とした夫があつては、此の方は何うも成らぬ。イヤそれよく、眼の當りなる此度の戦争、彼の公爵を煮出汁に使ひ、使へるだけ使つた上、凱旋の後は、日頃公爵を邪魔者にする、ゴテリルに殺させう。兎角リアとコルデリアを庇ひ立てする不届者、戦が濟んで彼奴等が手出しもならずなつたなら、何れ容赦は致さぬ奴、イヤ口先の理屈はさて置き、腕づくで闘らねばならぬ此の身の行末。

と退場

### 第二場 兩軍の中間なる原野

奥にて敵襲の喇叭 リア、コルデリア及び兵士大勢登場舞臺を過ぎりて其まゝ退場續いてエツァヤー及びクロスター登場

エツ コレ御老人、此樹蔭を假の宿と御頼みなされ、そして善人の榮えむことを、よつく御祈念あらせられい。私が再び還つて參る時には、嬉しい御土産を持參致しまする。

クロ どうぞ無事に往つて來られし。

とエツァヤー退場

敵襲の喇叭の響聞え、間もなく退軍の喇叭聞ゆる、エツァヤー再登場

エツ サア、御老人御手を取りませう、かうしては居られぬ、リア王には御敗北末姫君諸共生擒の御身となられました。サア御手を取りませう、御出なされ。

クロ イヤ、これで澤山のたれ死は此處でも出来る。

エツ ハテ、又其様な間違つた御心を、人間と申すものが、此世へ来るも往ぬるも天命なりや、天命に背いてはなりません、たゞ何時にても死ぬる覺悟が肝要で、ムりまする、サア御出あれ。

クロ げに、さういやればそれもさうか。

と二人退場

第三場 ドーバー附近 英軍の陣營

旗鼓を携へ勝誇りたる牀にてエドマンド、捕虜としてリア、コルテリアを伴ひ、隊長兵士等と共に登場

エド 役人共、其囚人を引立てい、追つつけ處分法に就き、大命の下る迄、よつく番を致して置け。

コル 幸を求めて禍を招ぐは、間々ある、習ひとは云ひながら、おいたはしい父上の御身の上どうも悲しうてなりませぬ、妾一人の上ならば、如何なる不運も、不運とも思ひませぬ、として父上、父上には御女妾には、姉君達、今は敵軍の御二方に、御對面を願ひませうか。

リア 否々々、此足で牢屋へ參ると致さう、其許と二人水入らずで、籠の鳥と歌ひ暮さう、父の祝福が受けたいと云ふならば、此父は膝をついて、却て其許が宥恕を乞ふぞや、祈禱も一緒、讃美歌も一緒、昔語を致した

り蝶々の様な大宮人を笑つたり小人共の話しあふ殿中の消息を立  
聞いたり又は直接にも言葉を交はし君龍の移り替り權門の盛衰何  
やかやと神の探偵でもあるやうに此の世の中の隠れた秘密を捜る  
も一興さて我等は牢屋の中から月の出入で差引する潮の様な君臣  
達が離合集散を、高見の見物と致さうか。

エド 其囚人を引つ立てい。

リア 此様な犠牲(自分等)の供物には神々も御手つかから香をよりかけて  
よも疎略にはすまじきにえ、乍去コルデリア其許とかう一旦一緒  
になりし上は神業ならばいざ知らず人間力で二人の仲は裂かせま  
い先づ其眼を拭ふがよいサア〜來やれ。

とリア、コルデリアを護送せられて退場

エド コレ隊長此處へ〜、此書附を受納あれ(と書附を渡す)そして只今の囚人  
の後から牢屋へ参られよ、足下の爲めに昇進の途を開いた某ハテ、此  
書附通りに致されたなら立身出世は瞬く間コレ聞かれよ、須らく時  
世に合はすべきは男兒の本分め、しき心は武人に似合しからぬも  
のでムる、足下が此度の大役に就きては、彼是の問答は無益たゞ承諾  
致さるゝか、それとも外に出世の方法があるや如何に、それだけが承  
りたう。

隊長 慥かに御受を致しまする。

エド 出来された首尾克く成し遂げて、楽しく此世を送られい。して又此  
儀は、一刻も早く、書中に示せし通りに計らはれよ。

隊長 不省ながら、穀麥を食つて、車を曳く牛馬ではムりませぬ、苟くも一

男兒に似合はしき役目とあらば、屹度致すてムりませう。

と隊長退場

賑やかなる喇叭の音の中にアルマニ、エテリル、レガン、役人及び從者等登場

アル エドマンド殿、今日の功勞天晴々々加之武運飽迄強く、此度の戦争の目指す敵を生擒られしは見上げた働。此上は件の捕虜を、一つには彼等の身分所業を考へ、又一つには我等が後日の安全を慮り、さて其上にて、相當の取扱を致すやう頼み入る。

エド 某は又件の老王には、御齡が御齡なり、まして御身分が御身分なり、其御慙然なる御身の上に、稍もすれば俗民の慙慙を惹き、我が部下の士卒をして、其戈を逆にせしむる如き、不思議の力もあらむと思ひ、密

室に押籠めまゐらせて、警固の者を附け置きました。又同一の慮りより、皇后をも諸共に、押籠めまゐらせましてムります。此上は明日にても、或は後日にも、何分の御處分に就き、御詮義あらせられう節、御召出あらば、早速御連れ申すてムりませう。乍去只今は、まだ汗も血も乾きませず、戦友を失ひし悲み去りもやらず。總じて如何なる義戦とても、身戰場の難を経たる者は、心熱して冷めざる中は、想ひ遣るだに、苦患てムります。さればコルデリア姫、并に父王御處分の義は、更に後日を期して、然るべきことと存じます。

アル コレ氣に障へて呉れるな、乍去此度の戦争に於ては、足下を以て、只だ一人の武將と思へど、共に萬機を統ぶる、予が同盟の君とは思はぬぞよ。

レガ イヤそれは、此妾の心次第で何うでもなること、其様な事は、一先づ妾に御問合せなされた上、仰せられたが宜しうムリませう。此妾に成り代り、妾が職權を身に帶して、三軍を率ゐたエドマンド。其一事で十分に、公爵殿が同盟の君主とも、謂はれぬ事はムリませぬ。

ゴチ 其様に勃然になることはないわいの。縱令其許が職權とやらを譲らずとも、エドマンド殿には其身の力で、如何なる功績をも立てうわいな。

レガ イ、ヤ此身に成り代り、此身の職權を帶してこそ、王公とも肩を並べると申すもの。

アル いかうエドマンド殿の庇立をせられるが縱令エドマンド殿が、夫の君であらうとも、夫より上によも力は入れられまい。

レガ 冗談が事實になるは、往々あることぢやと申しますぞへ。

ゴチ ハテ、其様な事を申した者は、大方戀で氣もそぐ、眼も垂んだ飯碗みてあらうわいの。

レガ 姉上、妾は少々氣分がすぐれませぬ。さもなくば、おもひれ御返答を致す所でムリですが、只今は申しませぬ。コレ大將(エドマント)が(軍勢)妾が軍勢も、捕虜も國も、みんな卿に預くる程に、卿の心一つで計らへや。妾の身の上とても其通り、残りなく卿に引渡しましたぞ。此上は卿を以て我が夫、我が主君と仰ぐ由を、世間一統に知らせたい。

ゴチ そんなら其許は、エドマンド殿を、我がものにせう意ぢやな。

アル それを留むるは、汝の力には及ばぬ事ぢや。

エド 又は公爵の御力とても。



アル ヤイ生れ損ひ、予には其力があるぞよ。

レガ (エドに) 早う太鼓を打たせて、妾の職權は卿に譲る赴を、三軍に知らせたが宜いわいな。

アル アイヤ暫く、申聞ける事がムる。コリヤ、エドマンド、予は大逆の罪を以て、汝を只今逮捕致す。又汝と諸共に此の婦人の皮を被つた毒蛇めを逮捕致す。(指しながら) まつたレガン殿、卿がエドマンドを後夫にとの其願ひは、ゴテリルに代つて某より差留めませすぞ。ハテ此殿御にはゴテリルの先約がムる。依つて夫たる某が、妻の爲めに此縁談に故障を申入れる。それ程後夫が欲しいなら、寧ろ某へ申込まれい、ハ、ア某の女房は、最早他に先約がムる。

ゴテ これは何とした狂言ぢや。

アル こりやグロスタ、身仕度はそれでよいな。然らば喇叭を吹いて、軍中を尋ね見よ。人も知つたる、汝が悪むべき数々の大逆を、刀にかけて證さむ爲め、汝の相手を致さむと、現れ出づる勇士があらう。若しさる勇士も現れずば、即ち予が相手を致す。

と手袋を投げる(挑戦の儀式)

いやかく予が申すことに、寸分の誤謬なきことは、汝の胸を割いて證して見せうぞ。

レガ え、胸苦しや、お、胸苦しや。

ゴテ (自) それでこそ、毒藥の効能は争はれぬ。(先刻より) レガンの毒を飲みし故と知れしるべ。

エド 其返禮には、某もかくの通り。

と同じく手袋を投げ出す

何ぢや某を以て大逆人とは、跡形もない卑怯な仰せ先づく公爵の  
喇叭を以て御尋ねあれ。召に應じて出て来る者なりとも、さては公爵  
御自身なりとも、何奴此奴の用捨はない。打ちみしやいて某が潔白を  
證かし、某が面目を立て、見せう。

アル 誰かある軍令使を呼出せ。

エド 罷り出でよ軍令使、軍令使々々々。

アル いや汝が頼む所は、只だ汝の一身ばかり、汝が率ゐし軍兵は、悉く予  
が名を以て微し出したるもの、然るに今や予が名を以て、既に暇を遣  
せしぞ。

レカ 漸々苦しうなつて参る。

アル レガン殿には不快の様子、予が陣屋へお連れ申せ。

とレガン扶けられて退場

軍令使登場

コリヤ、軍令使近う——喇叭を吹け——そして之を陣中に讀み聞か  
せよ。

役人 しゃく、喇叭を。

と奥にて喇叭を吹く

軍令使 陣中の將士聽聞せよ、其身素性正しく、門地賤しからざる將卒にて、  
我こそは今グロスタの伯爵エドモンド殿を、數の大逆を犯せる罪  
人なりと、一命にかけても云ひ張らむと思ふ者は、三聲の喇叭を合圖  
に名乗り出でよ。右エドモンド殿にはさる汚名を雪がむ爲め、屹度相

手を致さるべきものなり」

エド それ喇叭を と の第一聲を吹く

軍 最一度 と第二聲を吹く

軍 最一度

と第三聲を吹く、引續き奥にて返答の喇叭聞ゆる、エツァヤー 武裝し喇叭手を先立て、登

アッ 喇叭に應じて罷り出たは、如何なる存じ寄りか尋ねて見よ。

軍 其方は何者ぢや、名は何と申すぞ、身分はいかに。して又召に應じてかく速かに罷り出たは、如何なる存じ寄か申して見よ。

エツ いや某が名字は、大逆の牙に噛まれ、虫の喰つたやうに消え失せ申してゐる。なれども某が門地素性は、相手の敵同然てゐります。

アル 相手の敵とは誰を申すぞ。

エツ ハテグロスターの伯爵、エドマンド殿に代つて、相手をせらるゝは、何誰でゐりまするな。

エド 誰あらうエドマンド自身ぢや。して汝が拙者への申分は。

エツ 先づ、刀の鞘を拂ひめされい。某の申すことが、若し御氣に障つたなら、早速突いて來らるゝが宜い。某も此通り見られよ。大逆賊を滅ぼさむと、かけたる誓、身の大役身の面目を護らむ爲めの此一刀、無禮の舉動とばし思はるゝな。さてエドマンド、汝若年ながら、位高く權盛んに、武功著るく、新たに顯要の職に上り、勇氣膽略見るに足るとは申せども、神には不敬、兄には不悌、父には不孝の大逆人、まつたこれなる。明德の公爵に對して善からぬ企て、腦天の頂より足蹠の塵に至る迄、

汚れ果てた大逆人とは汝が事ぢや。ハテ此言葉が違うと申すか。然らば此腕此劍に、某が勇を盡して、汝の言葉に詐りあるか。あらざるか。汝が胸に試して見む。

エド 誠を申せば、汝の名字を云はせ置くべき筈ながら、汝が器量骨格、天晴なるに、詞付さへ賤しからぬ者と見たるが故、我身萬一の爲を思へば、武士道の掟に依り、相手は致されぬ所を、特別を以て致し遣はす。さて、汝が只今の、大逆呼はり、其詞は其まゝ、汝に返却致す。忌々しき虚言を申すの條、不届千萬、去りながら、かく云はれた丈では、身に泌ひまい。此劍を以て、未來永劫しかと思ひ知らせて呉れうず。それ喇叭を吹け。

と合圖の喇叭を吹き、兩人斬合ふ事、と、エド マインド倒れる

アル それ助けて遣はせ。

エド あゝコレ、グロスタ殿、これこそ正しく、兼ねて企んだ、たぐ 陷罪武士道の掟に依り、名乗りも擧げぬ相手には、相手を致すにも及ばぬもの。コレ卿は勝負に負けはせぬ。欺し討に遇うたのぢや。

アル 黙れゴテリル。黙らずば此書面(ゴテリよりエドへの書、ケントがオ)を黙らせて遣はす。コリヤ言語同斷の悪人エドマインド、是見て我身の非を悟れ、コレ破るな女、ハテ記憶があるてあらうが。

と書面をエドに與へる

ゴテ 縦令記憶があればとて、國の法律は妾の自由、我夫の自由にはなりませぬぞへ、ハテ誰が妾を何うするもので。

とゴテ退場

アル 奇ッ怪千萬、ヤイ此書面を存じ居るか。

エド 問はるゝ迄もない事ぢや。

アル 誰ぞゴチリルに従て参れ、何を致すやも計られぬ、よう氣をつけて遣はせ。

と役人一人退場

エド (エッヂヤイ) 汝が申せし程の事は、如何にも某致した覺えがある。イヤサ、もつと上手を致して居る、いづれ願れる時節があらう、乍去、それは最早過ぎ去りし事、某が一身とても其通りして某を斯様な目に合せたる、汝は抑も何者ぢや、素性正しき名門の子とあらば、恨みは残さぬ罪は恕す。

エッ いかにも、今は互に恨みを晴さう、コレ、エドマンド、素性に於ては、此

身は決して汝に劣る者ならず、若し憂りたらば、汝が我への罪は増すばかり、コレ聞け我が名はエッヂヤイと申し、汝が父の嫡子なるわ、實に神々に偏頗なし、不義の快樂に耽らむとすれば、其快樂を道具に使つて、不義者を罰せらるゝ、乍恐父上とても、暗い處で汝といふ子を設けられた、其報いで御兩眼を失はれた。

エド 實に道理、因果の車はこれにて丁度一廻り、某ははや覺悟致した。

アル さればこそ、其許(エッヂヤイ)の素振に、何うやら高貴い點があると見た、コレ近う参られよ、予は其許をも、又其許の父親をも、悪き者に思ひし事はなかりしぞや。

エッ 某とても、それは承知てムりまする。

アル して今迄は何處に潜み、父親遭難の始末をば、如何して承知致され

しぞ。

エッ 父の難儀を承りしは、父の介抱を致せし故てムリまする。いや御聞下され、掻摘んで申しませう。此胸も張り裂けるばかりの悲しい話でムリまする。殺せ斬れと、手殿しき父の命、何卒して遁れたいとの心から——あゝ命と申すは棄て難いもの、一思ひに殺されうより、翫り殺しに殺されても、少しも長う生きて居たい人心——身を狂人に變して、縋縋にくるまり、犬も厭ふ乞食姿で、忍び居しに、圖らずも兩眼を抉出かれ、血みどろになつた父に邂逅ひ、手引を致して、處々方々を渡り歩き、父に代つて乞食を致し、又は父の生害を、思ひ留まらせしも幾そ度なれども、某と云へる事は、遂先刻試合の場の上る時迄、遂に申聞けませなんだは、想へば誤り。さて試合の場にては、素より必勝は逆め期

し難き事故、初めて父子の名乗を致し、某が身を變して以來の、一伍一什を語り聞けましたに、さらでだに衰へ果てた胸の中、感慨に堪へやうらて、喜びと悲しみの中央に、微笑を湛へて、其まゝ永眠致しました。

エド 身に泌みて心苦しい其物語、本心に立廻るべき善知識。乍去其後を御話しあれ、まだ云ひたい事がある様子。

アル いやもつと悲しい話ならば、暫く控へられ。予はこれだけで、既に泣き出したい斗りぢやに。

エッ 悲しい物語が御厭なら、是だけでもう澤山とは御尤、乍去此上にも又々悲しい物語を申し上げねばなりません。某がかく悲嘆に暮れ居る處へ、さる一人の男参り、嘗ては見る影もなき某の乞食姿に、側へ寄りさへ厭はれしに、此時初めて某と知り、猿臂を伸して、某が襟頭に掛け、

天も破れよとばかりに泣出だし、又父が屍の上に身を投げ懸けさて  
リア王殿下、並に彼自らが古今無類のいと哀れなる經歷を物語り、其  
物語の中に悲しさいとまさりしか、彼が命の玉の緒も弛み初めし  
と思はれて、氣を取失ひ倒れし時、折しも響く二度目の喇叭。某は其ま  
ゝ此方へ馳付けました。

アル　して其男と申すは。

エツ　御追放のケント殿でムりまする、姿を變して恨みもあるべき、國王  
殿下の御供を致し、我身を賣つた奴隷でも、出来ぬ程の御奉公を致さ  
れました。

と紳士血の付いたる小き刀を携へ登場

紳　御救助々々。

エツ　助けてとは何を助けて。

アル　早やう申せ。

エツ　其血刀は如何なる仔細。

紳　まだ暖りて烟の立つ、コレ此血は御胸から——む、最早御死亡な  
されました。

アル　死んだとはそりや誰が早う申せ。

紳　夫人でムりまする、アルバニの公爵夫人でムりまする。さて又御  
妹君も、夫人の御手にて、御毒害と只今御懺悔遊ばしました。

エド　ヤア某は姉妹二人に夫婦の契を籠め置きしが、さては三人諸共に、  
祝言を致すぢやまで。

エツ　ヤ、ケント殿の御出てムる。

アル たとひ生あるも、生なきも、兩人を茲へ引出せ。

と紳士退場

これぞ我人に懲戒の天罰なれば、惘然とも思ふに及ばぬ。

ケント登場

お、ケントであつたか。折が折として式作法も相成らぬ失禮は互に許すと致さう。

ケン 某は國王殿下に、御告別の爲め参りし者。殿下には此の處に、御在てはムりませぬか。

アル いや一大事を忘れて居た。エドマンド、國王には何處に在すぞ、コルデリアは何處に居るぞ、イヤ、ケント、此有様を一見致せ。

と役者等コチリル、レカンの屍骸を引出す

ケン さて、これは何として。

エド 何はしかれ、此エドマンドはあやかり者、某故に姉は妹を毒害し、さて其上で自害を致した。

アル 誰かある兩人の顔を掩うて置け。

エド あゝ今暫しの命が欲しや、此通りの悪人ながら、致して置きたい善事が、ハテ少しも早う城中へ人を遣し、リア王コルデリア姫を御助けあれ。亡きものに爲奉れとの書付を、某より遣してムりませぬ。ハテ手遅れとならぬやうに。

アル さらば早う馳せ付けよ、エツチャー頼む。

エツ して其書付の所持人は何者、書中の赴を見合すべき由、汝の手形が欲し。



エド 實に、然らば某が劍を御持參なされて、隊長に御遣しなされ。  
アル 命限り根限り急ぐがよい。

とエツナヤ一退場

エド 其書付と申しまするは、公爵夫人並に某よりの差圖を以て、コルデア  
リア姫を獄中にて縊殺し表面は姫御苦腦の餘り御自害ありしやう  
に見せ懸けむとの計略でムりまする。

アル 此上は神の擁護を頼むばかりぢや、者共暫く彼方へ連れて參れ。

とエツナヤ一退場

コルデアリア、死せるコルデアリアを抱き、エツナヤ一、役人等と共に登場

リア 無念ぢや、口惜しい、お、人情知らずの其方共よつく聞け、其方  
共の口やら眼やらが此身にあらば泣いて叫んで、青天の圓天井も落

さずには置くまいもの娘は死んだ死んだぞや、生きた死んだの鑑定  
は手にも成る、娘は死んで石のやうぢや、コリヤ鏡を貸せ、娘の呼吸で  
鏡が曇るか濡れらなら、ハテ其時は生ある證據

ケン 聞及ぶ世界の滅亡が來つたか。

エツ 其日の俤を目に見る心地。

アル さては萬事休せるか。

リア ヤ、此羽毛が呼吸で揺らぐ、娘はまだ生きて居る、コリヤ今迄の嘆き  
も悲みも消えて了う時が來た。

ケン (跪き) お、殿下お懐かしうムりまする。

リア イヤ、彼方へ往んで呉りやれ。

エツ これは忠義無雙の、ケント殿でムりまする。



遂げてムる。

リア あゝさうであらう。

アル 殿下には浮の空で物を仰せらるゝ。されば御詞を懸くるも無益であらう。

あらう。

エッ いかにも詮なき事てムります。

二人の役人登場

役 エドマンド殿には只今死亡致されました。

アル それは今、齒牙に懸くるにも足らぬ事ぢや。コレ／＼列座の人々、拙者の意中を申聞けたい、外でもないが、國內瓦解の此の状勢、此儘棄て置くべきにあらざれば、苟も善しと思ふ手段は、悉く之を用ふべく、先づ拙者は老王殿下御存生中、國家統御の權を悉く御返納申すてムらう。

(エツヤ、及びケントトに向ひ) 又其許等には、舊領に安堵の上、各其功績に應じて、相當の昇進をせらるゝが宜い。其外凡て勤王の誠を抽んでたる者は、應分の褒賞に預り、不忠不義の徒は、又應分の所罰を受くるであらう。おゝ、アレ見られよ、あの御有様。

リア え、娘は殺された、生命がない。犬さへ馬さへ、さて鼠さへ生命があるに、其許には何故に息がない、最早其許は還つて來ぬ、盡未來際還つて來ぬ。え、何卒胸の扣鈕を外して呉りやれ、忝ないぞ、これを見たか、娘を見い、彼の唇を見やれ、それ其處を。

とリア倒れ死する

エッ それ御氣絶、申し殿下々々。

ケン あゝ悲しや、此胸が裂くる斗りぢや。

エツ 申し殿下、御眼を御開きなされ。

ケン いや却て御靈を妨げぬが宜い、御心安らかに、死出の旅路に御立たせ申すがよい。此世の荒い波風に、長く御引留め申上ぐるは、却て御本意に背くでムらう。

エツ 實に既や御冥目なされました。

ケン 想へば是迄御存生ありしが却つて不思議、謂はゞ疾くにも死ぬる御生命を、死ぬにも死なれず、今迄御持堪へなされしものと察しまする。

アル 御兩人の御亡骸を彼方へ御移し申せ、さて差當り我等はたゞ、此深き悲みにくるゝばかり、(ケント及エツサ) 我が心友たる御兩所は、何卒國政を司り、此の亂れた國家を統一の任に當らせ候へ。

ケン いや、某は何れ遠からぬ中、還らぬ旅路に上らねばならぬ老人、御主君が彼方より召しまする、否とはどうも申されませぬ。

エツ 留めて留まらぬ今日の悲み、たゞ此胸に湧いた想ひを、語り合ふが關の山、理に落ちた談話は思ひも寄らず、それにつけても彼程の御齡で、彼程の御難儀、吾等若輩がこれから如何に生きればとて、彼の様な難儀には逢ひもすまい、又彼の様な齡迄、生きたくもないものぢなア。

と葬式の曲の裡に一同退場

リア王の悲劇終

終りの地、昔、旧、御、難、儀、の、時、に、  
君、が、彼、方、よ、り、召、し、ま、す、る、否、と、は、ど、う、も、申、さ、れ、ま、せ、ぬ、と、  
留、め、て、留、ま、ら、ぬ、今、日、の、悲、み、た、ゞ、此、胸、に、湧、い、た、想、ひ、を、語、り、合、ふ、が、  
關、の、山、理、に、落、ち、た、談、話、は、思、ひ、も、寄、ら、ず、そ、れ、に、つ、け、て、も、彼、程、の、御、齡、  
で、彼、程、の、御、難、儀、吾、等、若、輩、が、こ、れ、か、ら、如、何、に、生、き、れ、ば、と、て、彼、の、様、な、  
難、儀、に、は、逢、ひ、も、す、ま、い、又、彼、の、様、な、齡、迄、生、き、た、く、も、な、い、も、の、ぢ、な、ア、

明治三十九年十一月廿七日印刷  
明治三十九年十二月三十日發行

定價金八拾五錢

著者 戶澤正保

淺野和二郎

發行者兼印刷者 大日本圖書株式會社

代表者 事務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座座丁目二十二番地

大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷

大日本圖書株式會社支社

沙翁全集

發賣元



78  
69



